

御所見通信

2019年1月31日

2月号

藤沢市立御所見小学校

校長 三橋 雅幸

御所見と牛

正門の坂を登ると、校庭の隅にいる“御小の牛”が右手に見えてきます。“御小の牛”と言っても、生きている牛ではありません。開校100周年記念に、建立した記念像です。鍛金作家の野口裕史先生(多摩美術大学教授)に制作していただきました。金属をたたいて伸ばして形にしていく鍛金という手法でつくられています。記念像には「大地に跳べ」という作品名がついています。子どもたちを優しく包み込む大地を、親しみのある大きくおおらかな牛で、空気を子どもたちで表しています。大地からエネルギーをもらい、将来の大きな夢や目標に向かって協力する姿を表現しているそうです。

記念像を見て、地域をよく知らない人の中には「きっと、御所見には牛を飼っている酪農家が多いのだろう。」と勘違いされる方もいるかと思えます。しかし、藤沢市全体でも、乳牛を飼っている酪農家は12戸、牛の数434頭(H29県湘南家畜衛生所調べ)しかないそうです。全国的に、家畜排せつ物法、輸入飼料の高騰などで、酪農家が減ってきています。御所見でも、後継者不足などで乳牛の飼育をやめてしまった農家がいくつもあるそうです。

それでも、3月に市民センターで行う“おしごと王国”では、畜産(牛のお世話をしよう)という仕事があります。昨年は、緑化流通センターに子牛を連れてきて、酪農家の人のお話を聞いたり、世話をしたりしていました。秋には、畜産ふれあいまつりも同じ場所で行われます。比較の問題ですが、市内の他地区に比べれば、まだ、御所見では牛は身近な動物なのかもしれません。

現在、市内の酪農家が搾った生乳は、共同して全量を集め、市内の乳用業者に販売しています。地域に根ざした酪農業を目指し、学校給食への供給量を増やしています。子どもたちが給食で飲んでいる牛乳は、市内の乳用業者が生産・販売しているものです。だから、給食の牛乳には、御所見産のものが使われているのです。乳用業者を介して、知らない間に地産地消をしていました。

こう考えると、御所見と牛とはいろいろなところでつながってきます。100周年記念像が牛だったというのも、偶然ではなく、何かの縁を感じずにはられません。



開校100周年記念像「大地に跳べ」